



「こころ豊かに生きる」～音楽を楽しむ～

富山県教育委員会 生涯学習・文化財室

室長 菊池 政則

人は生まれながらにして、多くの能力を持っているという。

例えば、赤ちゃんの手のひらにそっと指を添えるとぐっと握り締めたり、大人の呼びかけに微笑んだりする行為はよく知られている。音に注意を注いだり、明るさや動きを目で追ったりすることもその一つである。中でも、音には非常に敏感で、赤ちゃんは生まれつき「音楽を愛する心」を持って誕生していると言えるようである。

しかし、多くの場合、このような能力はそのまま放っておくと退化し、日常の変化に徐々に反応しなくなってしまふ。大人になると、それがさらに進み、大きな変化には驚いたり反応したりするが、その刺激が意味なく繰り返されると、そのうち反応しなくなり、ついにはその変化を無視してしまうようになる。

「音楽を愛する心」、その能力を高めた人は、この世には大勢いるが、その人たちは生まれつきの能力を退化させず、進化させた人たちと言える。いずれにせよ、もともと「音楽を愛する心」を持って誕生しているのが人間であるとするならば、「音楽を楽しむ」ことは本能であろう。

さて、「音楽を愛する心」を進化させた人たちの中で、音楽家と呼ばれる人たちがいるが、その音楽は、数百年経っても今なお、私たちの生活の中に流れ、息づいている。中でも、軽快で明るいイメージの音楽を次々と生み出した作曲家として、よくモーツァルトの名が挙げられる。先日、ネットで検索していると、「モーツァルトが現代に生まれていたら一体どうなっていたらだろうか？」という、とても興味深い文面を発見した。

ヴォルフガング・アマデウス・モーツァルトは、18世紀に活躍した、誰も知っている天才音楽家である。3歳からチェンバロを弾き始め、5歳の時には最初の作曲を行っている。幼少時から即興演奏が得意中の得意であった。神童と呼ばれ、ヨーロッパを演奏旅行で駆け回り、その場で聞いた長い音楽も聞

き覚えてすぐに軽やかに即興演奏してみせたり、門外不出の秘曲を暗譜で書き記したりするなどという、数々の神業のような逸話を残した宇宙人的な天才であった。

このモーツァルトが常に時代の最先端を走る音楽の創造者だったことを考えると、今なら誰も聴いたことのない独自の音楽をこの世に生み出したであろうことは想像に難くない。案の定、ネットでも「モーツァルトは、現代での最先端の音楽である電子音楽に、きっとはまっていたんじゃないか」という予想だった。このように想像を巡らすのも、「音楽を楽しむ」ことの一つである。

先ほども触れたが、この稀有の音楽家モーツァルトの楽曲を、21世紀の現在、テレビやラジオ、ネット等で流れる映画やドラマ、CMなどでもよく耳にするが、私たちは何気なしに心地よい曲として聞いている。

「クラシック音楽」というジャンルは、とかく難しいもので敷居が高いと勘違いされているが、案外、実は生活に密着した、「楽しむ」ことのできる音楽である。

「クラシック」とは、直訳すれば「古典的」であり、「クラシック音楽」とは「古典的音楽」と言うことになるが、現在、一般的には「西洋の芸術音楽」を指している。もちろん、モーツァルトの時代で、その音楽は「古典」であるはずもなく、最先端の「新しい音楽」であったろう。

現代でも、日頃あまり「クラシック音楽」を聞いたことのない人にとっては、それは「古典」ではなく、まさに「新しい音楽」と言える。赤ちゃんと同様に、新しいものや変化するものを生活の中に取り入れていくことほど、心がうきうきと湧き立ち、楽しいことはない。

今日からでも、「こころ豊かに生きる」ために、新しく「音楽を楽しむ」ことを始めてみてはどうだろうか。

